

嘘つき Lovers

### プロローグ

世の中、大きな幸せの後には大きな不幸がやってくる。幸せばかりの人生なんてあるわけない。それでも、不幸を歓迎するわけではない。私、かまたゆうり浦田悠莉が望むのは、波風のない平穏な毎日。幸せなんてなくてもいい。

だけど、懐かしい人からの連絡が静かな水面を揺らし始める。  
大学時代の友人。私は彼女に助けられたことがある。そんな彼女からのお願い。

「ある男を誘惑してほしいの」

電車に乗っていると、窓越しに見慣れた景色が流れていく。一瞬、窓がスクリーンのように私の過去を映し出した。

あの時、私はつり革を掴み、電車に揺られて窓の外の風景を眺めていた。

「電車かったりー。あーあ、早く車欲しいな」

隣から聞こえた声に視線を向けると、本当にだるそうに立つ彼。とりあえず同意しとくべきだと分かっているけど、私自身は移動にかかる時間が大まかにしか分からない車より、時間通りの電車のほうが好きだ。

「お金貯めてる？」

同意もしない上に、電車が好きと言えば不興を買うのは目に見えていたから、話を別の方向に持っていくとした。

「電車で移動する以上にバイトは面倒じゃん。それに、バイト始めたら遊べねーし」

車は欲しいが働くのは嫌だ。なら、諦めるしかない。私の出した結論。アルバイトなど、決まった日に出勤して、やるべきことをやればいいだけだ。労働の対価がお金。私はその仕組みが分かり

易くて好き。人間の感情のように曖昧ではないから。でも、面倒なことを避けたいという気持ちには同意できる。

「まあ、そうだね。面倒なことはやだよね」

「なんだよ、珍しく話分かるじゃねーかよ」

彼の機嫌がよくなったことで安堵する私。彼に気を使い、機嫌を損ねないようにする。彼の機嫌を損ねると面倒だからだ。

大学二年の時、彼から猛烈アピールののち告白された。恋とか愛とかどこかバカにしていた私にとつて、彼の押しの強さは初めて感じたドキドキで。少し悩んだけれど、彼と付き合うことにした。付き合っただけでなく、彼に求められるままに応じた。想像と違うのは最初だからだと思っていたのに、それは回数を重ねても変わらず、私はそういうことには向いていないのだという結論に至った。

早く終わらせるには相手を気持ちよくさせればいいのかというのも分かったし、彼はそのためにもどうすべきかを私に教えてくれた。

でも、あまり深く考えずにいたせいか、彼と会えばベッドに行くのが当たり前になった。その一方で彼は、私と会っている途中でも誰かから連絡があれば帰ってしまう。外食をしても、ホテルへ行っても、いつからか支払いは私の担当に。消えていくバイト代。なんだか虚しさを感じるようになっていた。

そんな付き合いに疲れ、私がいなくても彼は楽しくやっていくのだろうと思いついた時に生まれ

た「別れ」という選択肢。どんなふうに伝えたのかは覚えていないけれど、私は彼に別れを告げた。その時、表情を歪めた彼が手を上げた。その瞬間がスローモーションのように見えたのを今でも覚えてる。驚きはなく、心の中には「やっぱり」っていう単語が浮かんだだけだった。

別れ話になれば、暴力を振るわれる。男など自己中心的で、思い通りにならなければ暴力を振るうものだと諦めていた私を助けてくれたのは、祥子だった。彼女はいつもたくさんの友達に囲まれ、自分の行動にも自信を持っている華やかな女性で、私がそんな状況にあった時、私の彼氏を糾弾し、彼の暴力に甘んじていた私をも叱り飛ばしてくれた。

彼は祥子に対しても何かと脅しをかけてきたそうだが、祥子は毅然とした態度と粘り強さで、何とか彼との別れを勝ち取ってくれた。

改めて彼のことを好きだったかと問われても、はつきりとした答えが出ない。一緒にいなくて困ることも、切なくなることも、悲しいという気持ちすらなかった。

——電車同士がすれ違い、窓ガラスが大きく震えた。その瞬間私は我に返り、意識を現在へ引き戻す。

そんな恩がある祥子から久しぶりの連絡が来たけれど、用件はなんだろう。聞いてみたけど、会って話したいからと詳しいことは教えられないまま電話は切られてしまった。声の感じではあまり余裕がなさそうで、私の知っている祥子とは雰囲気違っていった。

もしかしたら祥子は何か困っているのかもしれない。まだ話もしていないけど、祥子のためなら

何でもしたい。私にできることなら……だけど。

社会に出て働くようになってから、少しずつ認められるようになった。

男性は私の知っているような人間ばかりではないと。嫌な奴もいれば、いい人もいる。

だけど、いい人だって付き合ってみたら変わってしまうのかもしれない。そんなふうに考えたら、付き合うことが面倒になり、別に彼氏がいなくても生活に支障はないと思うようになった。特別誰かを好きになることもない。日々、仕事をこなす今の私。

祥子と約束した金曜日。

「すみません、今日は定時で上がらせてもらいますから」

「お、かまちゃん。ついに男か？」

からかい半分と知りつつ、つい鼻で笑いそうになったのをなんとか堪え、柔らかな笑みを彼に向けた。私より十五歳も上でこの会社の先輩である高山さんは、いつも男の気配がない私をいじって楽しんでる。

「残念ながら、相手は女性ですよ。大学時代の友達です」

「なんだ、やっぱりかまちゃんに男の影はなしか。いかにぞ。今後の日本のために結婚をして子どもを作れ！ とまでは言わないが、恋愛はしておけ」

豪快に笑う高山さんは、デリカシーがないようできて、相手によってどこまで言っただ大丈夫なのかはちゃんと見極めている。

「はい、そうですね。世の中には高山さんのお宅みたいに幸せな家庭もあるんですよ」

「おいおい、かまちゃん。世の中の家族の大多数は、多少問題を抱えていても幸せなんだよ」

高山さんのところは夫婦円満。二人の子どもに恵まれて、デスクには家族写真が飾られている。家族についての私の考えは、高山さんとは違う。大多数の人達は我慢をしながら家族を続けていて、ごく一部の人たちが幸せなだけ。

「まあ、定時上がりの件は了解したけど、デザインは？」

「それはきつちり上げてます。もうサーバーに入れてあるので、チェックお願いします」

「それなら文句はないな。その感じだと、久しぶりに会う友達なんだろう？」

「そうですね。かなり久々です」

祥子とは大学卒業後徐々に会う間隔が空き、次第にメールのやりとりも減っていた。たまにメールをしようと思いついても、結局何もしまま。そうして時が流れてしまっていた。

「じゃあ、後は山永企画のスケジュール。急ぎじゃないけど、進めておいて」

「バッチリ。既に進めています」

「素晴らしいっ！ かまちゃんの成長ぶりがおじちゃん、嬉しいよ！」

「高山さんの教育の賜物ですよ」

高山さんはふざけて腕で涙をぬぐうような大げさなリアクションをするけど、私が成長できたのは、間違いなく新人のころから面倒を見てくれたこの高山さんの力が大きい。

私の勤める会社はオフィスマネジメントを行っている。ざっくり言えば、オフィスに関わる業務

全般を扱う会社。オフィス用品の販売、レンタルをはじめ、テナントの仲介、オフィスのレイアウト設計、オフィスの引越など、幅広いサービスを提供している。

その中で、私はオフィスのレイアウト設計部署に所属していて、高山さんをリーダーとするチームで仕事をしている。

「仕事が二の次でも困るけど、かまちゃんはいつも仕事ばかりだからな。久々の再会を楽しんでおいで」

私が軽く頷くと、これで残業なしの報告を兼ねた雑談は終了。仕事場では「会社にもお父さんがいるみたい」なんて言われている高山さんだが、私の知っている父親とはあまりにもかけ離れている。家庭不和の元凶だった実父を思い出しそうになり、私は急いで頭を切り替えた。

やるべき仕事は片付けておいたので、あまり心苦しさを感ずることなく定時に仕事を上がらせてもらった私は、高山さんの笑顔に見送られて会社を後にした。

祥子の指定したお店はおしゃれなイタリアン。私のほうが早く着いてしまったようで、通された予約席に祥子の姿はまだない。手持ちぶさたでメニューをパラパラとめくり、なんとなく眺める。

大学のころ、祥子を選んだお店に行く時にはいつも緊張していた。学生向けの料金だから大丈夫と連れていかれたのは、確かに本格的なところよりは安いだろうけど、学生にとっては背伸びをして行くようなお店。

まあ、そのお陰でテーブルマナーが身に付いたから、彼氏に使うよりよっぽど有意義なバイト代

の使い方だったはず。あの頃は自分で考えるということにあまりにも慣れてなくて、彼や祥子の言いなりになることが多かった。そんな私を変えてくれたのも祥子だった。それなのに、なんとなく疎遠になってしまった原因は私にある。

就職をして二年、新しい世界を知ったら、私は大学時代までの自分が嫌いになったのだろう。そんな時代を知っている祥子と会うのがどこか辛くて、いつの間にか少しずつ誘いを断るようになり、連絡もしなくなった。最近ようやく、それに気付いたのだ。今日はそのこともちゃんと謝ろう。

「お待たせ。何食べるか決めた？」

突然耳に祥子の声が届き、私は思考の世界から現実へと引き戻された。弾かれたように顔を上げ、彼女の顔を見た私は言葉を失った。

きれいに化粧はされているものの、精彩を欠く表情。あのころの凛とした雰囲気もなくなっている。一瞬人違いではないかと思っただが、よく見ればやっぱり祥子で、そのあまりの変わりように私は彼女に何かあったのだと悟った。

「久しぶり。無難におすすりコースがいいかなって思ってたところ」

メニューは開いていただけであまり見ていなかったのに、自分の動揺を祥子に悟られたくなくて、咄嗟にそう答えていた。

「結構早くに来たの？」

ぼーっと考えていたので、どれぐらい時間が経ったのか分からなかったが、時計を見たところそれほど長く待っていたわけではないようだ。

「ううん。そんなには」

「へえ。なんか、悠莉がすぐに決断できるとは思わなかった」

祥子の浮かべた笑みは昔のままでも少しほっとする。席に着いた彼女はメニューにさっと目を通してから、「私もおすすりコースにするわ」とすぐにコースを二人分注文した。

祥子が驚いたのも無理はない。あの頃の私はメニューを選ぶのに時間がかかり、結局祥子と同じのを頼むってのがいつものパターンになっていたから。

「まあ、私も成長したってわけよ」

軽くウインクをして見せると、祥子は口元に手を添えてクスクスと笑い出す。私は祥子のこの笑いが好きだ。そんな姿を見ると、少しずつ昔の感覚が蘇ってくる。

「へー、あの悠莉が成長ね。しっかりしているように見せかけて、実は抜けてて危なっかしかつた悠莉が。そのくせ、一度決めたことは頑なに通そうとして。それが明らかに間違った方向でもね」

祥子の分析に身を縮こまらせてしまう。成長はしたものの、抜けているというのは未だに言われている。

「どの辺が成長したのかなあ？」

「そ、それは……、ほら、悩まず即決できるようになったし。なんとか、仕事も一人前に」

必死に言い募る私を見て、祥子はくすくすと笑う。こうして必死に取り繕って笑われるのも昔から。こうして祥子といると、成長なんてしてないんじゃないかと思ってしまう。

「祥子。いつも連絡くれたのに、返事とかしなくてごめんね」

祥子の笑いが収まったところで、少し早口になりながら一息で謝罪を述べた。

「ああ、でも、今日は来てくれたじゃない。いざって時に来てくれたから、それでいいわよ」

祥子があえて『いざって時』と前置きをしたものだから、私は彼女がやはり問題を抱えているのだと不安になった。その一方で、私のかつての態度を彼女がさらりと許してくれたことに胸をなでおろす。

「それで、何かあったの？」

「……うん。まあ、その話は食事が終わってからでもいい？ お腹空いちやって」

「構わないけど」

食事中、祥子は仕事のことやら、最近の様子などを聞いてくる。私はそれに答え、続けて同じ話題を祥子にも聞いたけれど、曖昧な言葉で濁されてしまう。結局のところ祥子の近況が分かる話は聞けなかった。その辺りも食後の話に関わってくるといふことなのだろうか。会話をしながらも、訝しく思わずにはいられない。

コースも一通り終わり、食後のコーヒーをもらっているところで、ようやく祥子が話を切り出した。

「実は、今日悠莉に来てもらったのは、お願いしたいことがあったからなの」

「ごくりと唾を呑み込んだ。食事の時の和やかさは鳴りを潜め、祥子は思いつめた表情をしている。「なに？ 祥子からお願いなんで珍しいよね。昔、祥子に助けてもらった分のお返しもしないし、私でできることならするよ」

「そうだ。私は祥子に大きな借りがある。返せる機会が訪れたなら、多少無茶なお願いでも聞いて

あげたい。

時間が経ってから、あの彼との別れはすぐ大きなことだったと気付いた。あのまま、だらだらと関係が続けていたら、今の平穏な日々はなかっただろう。

あの当時全てを諦めていた私には、祥子の行動はおせっかいのように感じられたが、抜け出してみれば、自分がおかしかったのだと気付いた。

「ある男を誘惑してほしいの」

「え？」

どんな頼みごとだろうかと身構えてはいたが、あまりにも予想外のことと思わず聞き返してしまった。私の反応を見越していたのか、祥子はハンドバッグから、一枚の写真と一枚のメモを取り出しテーブルの上に並べた。

写真はその相手らしき男性が写っている。盗撮したものと思われる写真の男性はスーツ姿で、普通のサラリーマンのように見える。そして、メモのほうには相手の名前と会社名、住所などの個人情報を書かれていた。

「おかしなお願いだってことは重々承知してるの。こんなの、簡単に頼めることじゃないし。だけど、他にお願いできる人がいなくて」

祥子のお願いなら、すぐに「いいよ」と言ってあげたい。だけど、あまりにも自分にそぐわない頼みごとなのでしばし悩む。

「それって、どんな理由で？」

どうしてその男性を誘惑する必要があるのだろうか。それも自分ではなく、他人に頼むなんて。

「理由は……詳しくは言えないけど、そうね……復讐かしら」

「え？ 祥子がそいつに何かされたの？」

すぐに頭に浮かんだのは、祥子がその男に暴力を振るわれたのではということ。

「違う。私じゃないの。ごめん……。こんなこと頼むのに詳しいことは言えないなんて。ただ、私じゃ相手にバleshてしまう可能性があって」

私の最悪の想像が否定されて少しだけほっとしたけれど、納得したわけではない。

「誘惑して、それでどうするの？」

「相手その気になったところで、手ひどく振ってほしいの。とにかく、その相手をひどい目に遭わせたいの。最初は事故とか考えたんだけど、犯罪になっちゃうし」

事故って、車で轢くとかだろうか。確かにそれは犯罪になる。止めたほうがいい。

だけど大学時代、祥子が誰かの悪口を言ったり、恨みごとを言ったりするのは聞いたことがない。その祥子がこれほどまでに復讐をしたい相手って……

「あのね。祥子のお願いなら、どんなことでもしてあげたいけど、問題があるの」

「さっきの会話から悠莉には彼がいないと思ったんだけど、やっぱりお付き合いしてる人がいる？」  
こちらが説明するより先に祥子が勢いよくそう聞いてきたので、なぜか申し訳ない気持ちになっ

てしまった。

「ううん。あれ以来彼氏とかいないし、今後も多分できないと思うんだけど。ある意味、問題はそこでね……。誘惑してほしいって言われても、私にそんなことできるかな」

祥子はハツとした表情になり、瞬きを<sup>また</sup>する。そしてじーっと私を見つめてきた。そのふしつけさがいつぞや清々しいぐらい、祥子はじっくりと私を観察する。

祥子がそんなふうに見るのも無理はない。私の外見はどう見ても誘惑向きではない。髪は無造作にアップにしてバレッタで留めている。一度染めたら美容室に通い続けなければならないから、黒髪のまま。服装は、カジュアルな服装でも大丈夫という会社であるのいいことに、動きやすいパンツルックが多い。今日も黒のチノパンにトップスは紺のニットセーターだ。化粧だって、ファンデにルージュのみ。端的に言えば地味。男性を振り向かせる要素が見当たらない。

「……ごめん」

祥子は視線を逸らして小さく呟いた。その直前に彼女が見せた諦めの表情に胸が痛んだ。私では力不足なことを祥子も悟ったんだろう。私の唯一の彼との付き合いが、最初から最後まで受け身だったことを祥子も知っている。そんな私が初めて会う男性をどうやって誘惑できるというのだろうか。

「今の話は忘れて。断ってくれて、ほっとしているっていうのも本当なの。こんなことを頼むのは止めたほうがいいんじゃないかって、話をする直前まで悩んだし。やっぱり、こんなことで友達を利用するなんていけないよね」



断ってしまった。そのことで、祥子を悲しませたんじゃないかと、私はいたたまれない気持ちになる。私が疎遠にしてきたことも、あっさりと許してくれた祥子。

「利用なんて……、私も誘惑できるぐらいの恋愛経験があったら、即答でやるって言いたかったんだけど、ごめん。祥子からお願いつて言われて、ようやく恩返しができると思ったのに」  
「ううん。ごめん、いいの。やっぱりこれでよかったんだよ」

顔を上げた祥子は、やはり複雑な――落胆と安堵をない交ぜにしたような表情だった。

家に帰ってから祥子の話がずっと頭から離れない。祥子が詳しい事情を隠してまで、私を頼ってきたのだ。とんでもないお願いだけど、彼女が本気なことは伝わってきた。祥子がそこまで追い詰められているのに、私は……

でも、誘惑って、私には難しすぎる。

いろいろと考えながら眠りについたせいか、その日は夢の中でまで祥子に訴えかけられた。現実の祥子は断った後はそれ以上言っつてこなかったが、夢の中の祥子は私が「うん」と言うまで懇願していた。

久しぶりの寝覚めの悪さは、翌日の仕事でも後を引いてしまい、なんとか仕事をこなしているとあった状態。

「どうした、かまちゃん。昨日は久しぶりに友達に会ったんだろう？ まるで、葬式の後みたいじゃないか」

「葬式って、そこまでひどくないですよ」

あまりの言いように何か言い返そうかと思ったが、ミスこそないものの集中力に欠けた勤務態度を遠回しに注意してくれているのかもと思い直した。

「相談されたのに、私じゃ力になってあげられそうもなくて」

こうして口にしてみると、自分のふがいなさや身に染みる。しかも、仕事場でこんなことを零してしまふなんて。

「なんだよ。諦めるなんて、かまちゃんらしくない。とりあえずはやってみるって精神の持ち主だと思っただのに」

さもがっかりだと言わんばかりの態度だったけど、高山さんが私を高く評価してくれていることの裏返しのように、ちょっとくすぐったくなる。本当は仕事以外のことでは諦めが早いだけだけど、仕事中にこんな人生相談をしているのかと気になりつつも、もやもやを一人で抱えていられず、高山さんに聞いてもらうことで楽になろうとしている自分がいる。

「そうは言ってもやっぱり、向き不向きがあると思うんですよ」

「なんだよ。俺だって最初にかまちゃんの指導した時、この娘には無理だなんて思ってたけど、かまちゃんは見事な努力と根性で一人前になってきてるじゃないか」

「私がこの仕事を続けていられるのは高山さんの指導のお陰ですよ」

私は最初の頃、自分でもこの仕事に向いてないって思うぐらい使えない新人だった。それはよく覚えている。何度も高山さんに怒られ、励まされ、ここまで仕事をこなせるようになった。私の

指導担当が高山さんでなければ、ここまで来れなかっただろう。

「おだてても、おじちゃんは相談に乗るぐらいしかできないぞ」

「いえ、なんか、仕事でだつていうのにすいません」

「おいおい、一切雑談がない職場なんてないだろう。このぐらい、さぼりにはならないさ。後輩の悩みが片付いてくれれば、仕事も円滑に進むし、そうすると会社の利益になるだろう」

やや無理やり感のある論法に思わず笑ってしまう。こんなことが言える高山さんは本当に尊敬できる。社内でも高山さん以外の社員とはあまり話したりしない私が浮いた存在にならないのは、やっぱり高山さんのお陰だと思う。

「無理なりにがんばれば、なんとかかりますかね……」

「何をがんばるのかは分からないけど、かまちゃんがんばるなら、なんとかなるだろう」

「なんとかかりますかね？」

分からないと言いながらも、あっさり大丈夫なんて太鼓判を押してしまう高山さん。少しばかり呆れてしまうものの、それ以上にありがたいという気持ちのほうが大きい。

「なんとかなるだろう」

そして、再び背中を押してくれた。

「私……、後で友達に連絡してみます。できるか分からないけど、何もしないでモヤモヤしているよりも、やるだけやってみたほうがいいので」

「おう、それでこそ、俺の知ってるかまちゃんだな」

そう締めくくると、高山さんはドンと書類を私の机の上に置いた。

「これ、次のクライアントの資料。目を通しておくように」

「はいっ」

まだ、具体的にどうするかは決めていないし、そもそもどうすればいいのかも分からない。

だけど、今決めた。祥子のために、一肌脱いでみよう。

「高山さん、ありがとうございます！」

「おう、やってみろ。『なんとかなる』しか言っていないけど、失敗しても俺のせいにはするなよ」

最後まで冗談っぽかったけど、高山さんは私の悩みを解決してくれた。仕事を終えた私はすぐに祥子に連絡を取り、引き受けることを伝えた。

祥子は何度も無理しなくていい、と言ってくれた。けれど、できるところまでやってみるからと半分押し切る形で引き受けると、祥子は小さな声でお礼を述べた。

## 二

手には祥子から改めて受け取った写真がある。個人情報についてはこの前のメモではなく、きちんとした調査票をもらった。

彼の名前は藤さん。大体二十時ごろに退社すると調査票に書いてあったので、とりあえず彼の会

社の前で出てくるのを待つことにした。仕事が終わってからすぐに移動してきたものの、時間はぎりぎり二十時前。もし、彼が早めに帰ってたら無駄足になってしまおうが、とりあえず二十一時までががんばるつもりでいる。

一体、どうしたら知りもしない人を誘惑できるんだろうか。まずは知り合うところから始めるんだらうけど、ここまで来ておいて未だにどう声をかけるべきか決めかねている。インターネットで『誘惑する方法』なんていうのを調べてみたが、私の知りたいことを教えてくれるページは見つからなかった。

ベタだとは思うけど、『ぶつかってみる』『目の前で物を落としてみる』、それぐらいしか頭に浮かばない。実行するにはいまいちだ。ぶつかつたとして、謝ってそこで食事に誘うのも変だし。物を落としても、気が付いてもらえなかつたら始まらない。

「あ」

一人であれこれ考えていたら、写真によく似た人物がビルから出てきてしまった。会社の入り口に照明はあるものの、夜の暗さでちよつと自信がない。時計を見てみたら、二十時半を少し過ぎたところだ。

彼の後ろになってしまったので、物を落とすという手段は使えなくなった。あとは、ぶつかるしかない？　すぐに後を追うように歩き出したが、彼——藤さんは歩くのが速くて、後ろにいる私がぶつかるには走るしかない。この辺の道に詳しいなら先回りをして脇道からぶつかるってこともできたんだろうけど。調査不足だったことを今さらながら痛感する。元々臨機応変に進めるつもりだ

つたが、ここまで無計画なのも問題だなと思った。

いや、今日は下調べってことで、接触するのは後日でもいいのよね。でも、そしたらまたいつ出てくるか分からない状況で見張ることになる。やっぱり、無理にでも今日のうちに接触しておいたほうが後々楽になるかな。

そう考えながら、藤さんを見失わないよう早足で追いかけるが、既に息が上がり始めている。歩くのは速いほうだけど、やっぱり男の人の早足は違う。このままではあと数分で駅に着いてしまう。上がる息、焦る思考。

どうしよう……。もう、どうにでもなれっ！

足の速度を上げて距離を詰め、ぶつかる勢いで走り出そうとした瞬間。

「きゃっ！」

突然、藤さんが立ち止まって振り返る。勢いを止められなかった私は彼に思いつきりぶつかってしまった。

「大丈夫ですか？」

思ったほどの衝撃はなく、私は抱き合う形で藤さんに受け止めてもらっている。頭上から降ってくる声は想像よりも低くて落ち着いていた。

「す、すいません！　あのっ、えと……」

まさか、相手が振り返るとは思っていなかった。しかも、まだしっかりと体を支えられている。

あまりの密着度に、次にどうするべきかが全く浮かんでこない。

「ケガは？」

肩を掴まれて体を離されると、藤さんの顔がしっかりと見えた。

瞳は切れ長で、黒い髪はきつちりと整えられていて少しだけ冷たい印象がある。間違はなくそれは写真に写っていた人で、私が誘惑する相手。

何も言葉が浮かばず、私はじっとその顔を眺めてしまう。すると、藤さんの口がゆつくりと動いた。「ケガはしてませんか？」

先ほどよりもゆつくりとした口調。私が反応をしないから怒っているのかとも思ったけど、表情を見る限りそうではないようだ。どうやら穏やかな人らしい。

「ケガっ……。大丈夫です。していません」

どうすればいい？ その一言が頭の中をぐるぐる回り、まともに言葉を発することもできない。ケガはしていないし、悪いのは私のほうなんだけど。

「本当にすいません」

「大丈夫ならいいけど、それでは」

藤さんは私の肩から手を離すと、すぐに踵を返そうとした。藤さんが行ってしまう。

「あのっ！」

「何か？」

思わず呼び止めてしまった。彼は怪訝そうにこちらを見ている。

「私とホテルに行きませんかっ！」

ちよ、直球……

私、間違えた。絶対に間違えた！ ごめん、祥子……。がんばったんだけど、私にはやっぱり――

「いいですよ」

「え？」

思わず聞き返してしまう。だって、この人は今なんて言った？

「いいですよ。行きましょうか？」

呆然とする私の手が温かい手に包まれる。そして、引つ張られるにまかせて私は足を動かした。

「あの……、本気ですか？」

「ええ、別に問題ないですから」

問題ない？ 何が？ これは成功しているの？ 頭の中にたくさんの疑問符が浮かぶ。藤さんの足取りに迷いは感じられなくて。私のほうがよっぽど動揺してしまっている。

一体、どこをどう歩いたのか覚えていない。気付けばホテルの一室にいて、キスができそうなくらい至近距離に藤さんの顔がある。

「で、人の後をコソコソと、いや、ドタバタと追ってきた理由はなんなのかな？」

「え？」

出会った時に感じた物腰の穏やかさは既がない。そこには獲物を捕えた肉食動物のような笑みを浮かべた、別人のような藤さんがいる。

「気付かないでも思った？」

まさか、ぶつかつたのも。ホテルに行くと言つたのも、最初から私のことに気付いていてわざと？  
「あんなに足音させて、一定の距離でついてきてたら、ちょっと勘のいい人なら怪しむと思うよ。  
それに、突撃しようとしたでしょ。何が目的なのかな？ 僕は君に見覚えはないけど、いつも見知らぬ男をホテルに誘つてるわけ？」

矢継ぎ早に飛んでくる質問。私、今、ものすごく窮地に立たされている気がする。

「まあ、いつも男を誘っているとは思えないぐらい雑な誘いだけど、今までそれで成功した相手っているのかな。あ、何、だんまり？」

怖い……。笑っているのに、怖すぎる。この人、ちょっとやばい人じゃない？ 私なんかでどうにかなる相手じゃなさそうなんですけど。あまりの怖さに目を合わせないように顔を背ける。

「ええっと、すいません。人違い……しました」

こんな幼稚な言い訳……

「君は僕のことをバカにしているのかな？」

「いえ、滅相もないです」

逃げたい。今すぐこの部屋から消えたい。でも、無理ですよ。この人、そう簡単に解放してくれるとは思えないし。ごめんね、祥子。高山さん、やっぱりがんばってもダメなことであるみたいです。

心の中で後悔しつつ、ここにはいない祥子と高山さんのことを思い出す。

「それじゃあ、そろそろ喋しゃべってもらおうか」

藤さんの指が私の顎を捉える。必死に視線を泳がせるが、距離が近いせいでどうやっても目が合ってしまう。蛇に睨まれたカエルってこんな気持ちになるのかな。考えてみたら蛇とカエルが一緒にいたところって見たことがない。

いや、違う。蛇とカエルのことなんて今はどうでもいいのよ。問題はと言えば、この人をごまかすことができるか。祥子のことを言うわけにはいかない。見ず知らずの相手をホテルに誘う理由って……

「その、一目ぼれと言いますか、見た時にかっこいいなあと思って、つい後をつけてしまいました」

「さつき、人違いっていうのはやっぱり嘘なわけ？」

「はい。すいません」

「君、素直なの？ バカなの？」

素直ではないけど、今まさに自分のことをバカだと思っている真っ最中ですよ。

「どちらかと言えば、バカのほうかと」

「面白いね……で」

顎に添えられていた手が離されて、ほっとした直後。

「ああっ！」

私が握っていたカバンが強引に引たくられた。くると私に背を向けた藤さんは、私のカバンを物色し始める。

「ちよ、それは！ さすがに！」

背後から奪い返そうとするものの、藤さんは器用に私の手を逃れつつ、カバンの中を漁<sup>あき</sup>っている。  
「喋<sup>しゃべ</sup>ってくれるならこんなことをする必要もなかったんだけど、バカっぽいくせに言い逃れしそ  
うだつたからね」

「待った！ それはダメです！」

今藤さんが手にしているのは、私の社員証。

「へえ、これかあ」

ああ、墓穴掘った。これじゃあ、相手に弱みを握られてしまったも同然。

「蒲田……」

どさりと床にカバンが置かれ、藤さんの手には社員証が握られている。

「悠莉」

身元がしつかりバレてしまいましたよ。

「勤め先は、へえ。オフィスビジネスシステムか」

「……ご存知ですか？」

「まあ、結構有名だよな」

終わった。会社までしつかりと知られてしまった。

「で、蒲田さん。まだ、だんまりを続けるつもりかな」

先ほどと違って距離はあるものの、逃げ出すことはできない。藤さんの手には私の社員証。足元

には私のカバン。両方を奪取してなおかつ逃げ切る。そんなの無理。

「僕も女性にひどいことをしようとは思っていないけど、平和的解決のためにも蒲田さんのほうか  
ら自主的に喋<sup>しゃべ</sup>ってもらえないかな」

悪魔だ。これは悪魔の微笑みだ。だって、黒い！ 黒すぎる！

「分かりました。話しますから、まずはそれを返していただけないでしょうか」

できるだけ下手<sup>したて</sup>に出てみる。そして、平和的解決の方向でこの場を逃れ、祥子には失敗したと謝  
ろう。

「いや、まずは白状してもらおうのが先かな。そしたら、これも返すよ。蒲田さん？」

「さん」の部分が妙に上がる。わざわざ名前を呼ぶ時に妙なアクセントとかつけないで下さい。

藤さんはどんなことでもしそうな威圧的な雰囲気をもとっていて、全く油断ができない。こんな  
人だなんて、調査票には書いていなかったのに。

ふと彼の足元を見ると、床に下ろしたカバンは倒れ、そこから藤さんの写真がちらりと出かかっ  
ている。幸い、裏返っているから藤さん本人はまだ気付いていない。

「そしたら、まずは座って話をしませんか？」

今のこの微妙な立ち位置から、カバンを回収しようとするれば怪しまれてしまう。まずは、先に藤  
さんにソファまで移動してもらおう。そうすればカバンに近寄れるはず。

「座ったほうがいいぐらい、長くかかる話ってことかな」

「いえ、まあ、そうですね」

祥子のことは出さずに説明するとしてもそんなに時間はかからないと思うけど、話し終わってから藤さんがどう出るかが全然分からない。

「蒲田さん」

「は、はいっ」

ニヤリと口角を上げた藤さんに、緊張が増して背筋に汗が伝う。

「君は本当に分かりやすい娘だね」

「え？」

くっくくくと抑えた笑い。私の周りで、こういう笑い方をする人はあまりいない。どことなくバカにされているような。いや、もう既に正面を切ってバカとか言われていたんだった。

「このカバン」

すっとしゃがんだ藤さんは足元にある私のカバンを持ち上げた。その拍子にハラリと藤さんの写真が床に落ちる。

私は我ながらすごい勢いで彼の足元に飛び込み、必死に写真を手で押さえた。

「蒲田さんの視線がねえ。このカバンには何かがあります、見ないで下さいって必死で訴えていたけど」

床に這いつくばる私に冷めた視線を投げかけ、余裕の態度で再び人のカバンを漁り出す。

「藤永史に関する調査票ねえ」

それは、祥子から預かったもう一つのもの。写真以上に見られては困るものだった。

「これ、興信所の封筒だよ。ここまで調査しなければならぬってことは、確かに座らないと話ができないよね」

床に這っている私の前を横切り、藤さんはベッドに腰掛けた。脚を組む動作が優雅で、ふと脚が長いのだと気付く。彼はその組んだ脚の上に肘をつくと、手に顎を載せた。勝者が敗者を見下ろしているように見えてしまうのは、私自身の後ろめたさゆえだろう。

ゆっくりと体を起こし、その場で正座をする。

「そんなふうには座らないで、隣に座れば」

「いえ……、私はここで充分です」

申し訳ない気持ち、それに、彼に近付きたくない気持ち。どちらかと言えば、後者のほうが大きい。「じゃあ、話を聞こうか」

ゴクリと唾を呑みこむ音がやたらと響く。無表情になった藤さんから注がれる、穴が空いてしまふようなほどに鋭い視線。

「あなたを誘惑して、その気になったところで振るつもりでした」

簡潔に述べてみたが、それを聞いた藤さんは口角を上げる。先ほどと同じ、ヒヤリとする笑顔。

よくよく見てみれば、目が全然笑っていない。

「その理由は？」

「……詳しくは言えませんが復讐です」

「復讐なんて、身に覚えがないなあ」

いや、絶対にそれは嘘！ この人の性格なら、恨みの一つや二つ、いや、十ぐらいあっても不思議じゃない。性格が悪そうなもの。

「身に覚えがなくても、恨みを買うことはあるんじゃないですか」

つい棘々しい口調になってしまうのは、この計画について話していた時の祥子の様子を思い出したから。どんな理由かは知らないけれど、この人は気付かずに誰かを傷つけている。

「蒲田さんが僕を恨んでいるの？」

「……それは、言えません」

「言えませんって時点で蒲田さんじゃないんだろうね」

「う……」

誘導尋問と言うんだろうか、単に私の頭が回らないだけ？ 確かにこんな含みのある言い方をしたら、別の人の存在を疑って当然だ。

でも、絶対に祥子の名前だけは出さない。どんなにカバンを漁られても、祥子に関する情報は出てこないはず。連絡先は携帯にあるけど、数あるアドレスの中から共犯者として特定される可能性はほぼない。

「じゃあ、蒲田さんはその誰かさんに弱みを握られていて、仕方なく誘惑することになったのかな？」  
「脅されてなんかいません！」

私が自分で力になりたかかったから。祥子の助けになるならって思ったから。

「じゃあ、家族がお友達かな？」

「家族のためなんて、ありえません」

反射的に出てしまった言葉。言わなくてもいいことを言ってしまった。これじゃあ藤さんにバカにされても仕方ない。だって、自分から選択肢を減らしてるし。

「素直だね。お友達思いな蒲田さん」

この人の言う「素直」はイコール「バカ」ってことだ。絶対に。

肯定と取られてしまうかもしれないけど、ぐっと押し黙る。これ以上墓穴を掘りたくないし。祥子の存在につながるような話題は危険だ。

「じゃあ、聞くけど。蒲田さんは、仕事帰りに背後から怪しい男性に追いかけて、ぶつかられたと思ったらホテルに誘われ、挙句そいつが自分に関する調査票を持っていました。そんな時でも謝られたらすんなり『いいですよ』と許すのかな？」

「……………いいえ」

声が小さくなってしまふ。逆の立場だとしたら、すごく怖いし。下手したら警察に相談するかもしれない。

「だよね」

当たり前だと言わんばかりの態度で藤さんは頷いて見せる。

「本当にすいません。自分が同じことをされたら怖かったと思います。でも、もう追い回したりはしないので、今日のところはこれで……」

都合のいいお願いをしているのは分かっている。だけど、明らかに作戦は失敗。それを祥子に伝



えなければいけない。

「せめて、その黒幕の正体ぐらい教えてもらわないと。こちらとしても第二の蒲田さんが現れるのを警戒しないといけないわけだしね」

藤さんは怖い人だけど、言っていることは正論だ。私との口約束だけで安心するなんて無理だろう。でも、祥子に迷惑をかけることはできない。

「それは言えませんが」

引き受けたことを失敗しただけでも申し訳ないのに、さらに相手に正体をばらしたとなれば合わせる顔もない。

「平行線だね」

わざとらしいため息。今ならカバンを持って、逃げ出すことができそう。でも藤さんの手には私の社員証に、祥子から預かった藤さんの調査票。ここで逃げて会社に来られたら、今よりもひどい状況が待っているそう。

やっぱり、逃げるのはなし。何かしらの情報を明かさないと許してもらえそうにないけど、祥子のことは言えない。かと言って、復讐という以外の事情など聞いていない。

「しようがないなあ。こつちが譲歩してあげようか？」

願ってもない申し出に、驚いて藤さんを見る。じつとこちらを見据える彼は信用できないが、こちらにはもう手立てがない。きゅつと唇を噛むと、ゆっくりと頷く。

「僕の名前は藤じゃない」

「え？」

だって、調査票と写真。ここまで揃っているのに人違いなんてあるの？ 慌てて、手で押さえていた写真を拾い上げて確認する。本人を目の前にしても、写真と同一人物にしか見えない。

「必死になって隠そうとしたそれは、僕の写真か何かかな？」

全てが見通されているという居心地の悪さ。

「雑な探偵を雇ったものだね。この調査票に関しては問題なく藤さんのものだ。特に間違いは見当たらない。その、写真。見せてごらん」

既にバれてしまっているし、隠しても無駄だろう。立ち上がり、写真を藤さん……ではない、誰かに手渡す。

「この写真は僕だね。これなら君が間違えるのも無理はない」

「あなたは……誰ですか？」

私の名前は既に知られてしまっている。藤さんではないとしたら、この人は一体……

「僕は藤永」

「フジナガ……さん？」

藤さんと一文字違い。調査票で藤さんの名前は永史となっていた。フジナガさんの『ナガ』はもしかして『長い』の長ではなく、『永久』の永？

私の考えを察したのか藤……永さんは続ける。

「そう、漢字で書くと藤さんと僕はまるで一緒。だから探偵も間違えただらうけど。僕の下の名

前は史。藤さんの名前は永史」

藤永さんは、ご丁寧に胸ポケットから出したペンで調査票の藤さんの名前のすぐ上に、自分の名前と読み方を書いてくれる。

『藤永史』と『藤永史』。

「そんなわけで、君は人違いをしているわけだけだ」

最悪だ。失敗の上に人違いって。いや、この場合成功しちゃってたら、それはそれで問題なんだけど。「さて、どうしようか？」

いじわるな笑みで私を見上げてくる。

「ごめんなさい。で、許していただけたりは……」

「しないねえ」

その笑顔は、どう見ても楽しんでるようにしか見えない。

「そうだ。蒲田さんはこのまま、復讐を実行するっていうのはどうかな？」

復讐を実行……

「でも、あなたは藤さんと知り合いませんよ……」

「知り合いついていうか、同じ会社で名前が似てるからね。知ってはいるけど、仲がいいわけじゃないし」

知り合じゃなくても、同じ会社の人が誘惑されるのを黙って見てるっていうの？ そんなの、この人にとってどんな意味があるんだろう。

「そのー、なんでまた？」

彼の真意が全くもって分からない。さっきまでは、許すつもりは一ミリもありませんって態度だったのに。

「まあ、いろいろと理由はあるけど、一番は面白そうだから」

「おもしろそう？」

私が、人を誘惑しているところが？ 決死の覚悟で挑んでるっていうのに。

「まあ協力するというよりも、口出したと言って言ったほうがいいかな」

「なんか、人ごとだと思ってる楽しんでませんか？」

どう見てもこちらの深刻な状況などみじんも考えてない軽いノリじゃないですか。

「人ごとだし、迷惑被ったのを許す代わりに、楽しませてもらおうってだけだよ。君の社員証を持って、藤さんに今回の顛末を教えるってことも僕はできるけど」

「それは！」

一度は失敗してしまったものの、まだチャンスがある。それが、この人にかかっているなんて……。私は悪魔の手の上にいるっていうの？

「君に選択権はない」

断言されてしまった。確かに、この場の主導権は向こうが持っている。こういう裏があるにしろ、私はその提案を呑むしかない。

「……口出しでも何でもして下さい。私としては、このまま計画を続けられるに越したことはありません」

ませんから」

嫌だけれど、仕方ない。この一時間、何度心の中で「もう終わりだ」と叫んだだろうか。とりあえず、今のところは首の皮一枚でつながっているらしい。

「では、交渉成立。そうだな、まず一つ目」

「なんでしょうか」

口を出すと言っていたが、早速開始らしい。一体、どんなことを言われるのやら。

「君の誘惑スキルはないに等しい」

「……それは、なんとなく自覚しています」

「よくも、こんな役を引き受けたね」

フンって鼻で笑われる。本日何度目かのバカにした態度。

「まずは、僕をベッドに誘ってごらん」

「それは……随分ハードルを上げましたね」

「じゃあ、聞くけど。僕が藤さんだとして、そしてあのあからさまに怪しい誘いに乗るバカだとして、騙し通せていたら、このホテルで何をする気だったのかな？」

何をと言われても、あれは勢いで言ったものだから、その後はケースバイケースというか、相手の出方次第というか。

「えー、それは状況を見てですね」

「楽しくお話しして終わり？ 誘惑っていうくらいだから、体の関係だっと思ってているんじゃない

のかな？」

「まあ、確かに」

それが最後の手段とは思わないけど、その必要はあるかも、とは考えていた。

「なら、問題はないね。僕を誘惑してごらん」

こう、正面を切って言われてしまうと何だか。

……まずはキス。

一步、二歩と藤永さんに近付いてみる。ベッドに座っている藤永さんの顔は、かた屈めばすぐそこだ。近付くと顔がよく見える。じっとこちらを見ている瞳が「やれるものならやってみろ」と言っている。やってやろうじゃありませんか。

首を傾げて、大よその位置を確認すると目を閉じた。そして、そのまま藤永さんの唇に自分の唇を重ねる。しっとりとして、思っていたよりも柔らかかな感触。

どのくらいだろうか、もういいかなと思ったところで唇を離れた。

「十点」

「あら、満点ですか」

あっさり合格したので驚いてしまった。

「やっぱり、バカだね。百点満点のうちの十点だよ」

「え？」

「僕は誘うように言ったのに。あんなキスで欲情できると思ってるの？」

「欲情……は、しなそうですね」

「触れるだけのキスしかしていない。しかし、それ以上のキスって基本的に男性からするものでは？  
」では、そちらからどうぞ」

「ここは素直に言葉にしてみる。しかし、藤永さんは一瞬目を睨り口元を歪ませる。

「君、彼氏いたことない？」

「いや、あります」

最低、最悪な男だったけど、一応は彼氏だったはず。

「なんか、いろいろと言いたいことはあるけど、君は変だね」

「あなたこそ」

「何か言ったかな？」

「いえ、何も言ってません」

さりげない言葉に込められた圧力にあっさり前言撤回する。不機嫌そうな顔とか、怖い笑顔とか、無表情は見たけど、軽くとはいえ睨まれたのは初めて。かなり、怖いですよ。

でも、心の中で藤永さんを変な人だと思っうのは自由なはず。とりあえず思っうだけにしておこう。

「不思議なんだけど、君は知り合っつて間もない男にキスするのに抵抗はないの？」

「そうですね。あまり」

別に挨拶みたいなものだと思えば、キスなんてそれほど抵抗感はない。

「ではセックスは？」

「正直に言えば嫌いですが、まあ、今回は一肌脱ぐつもりで引き受けたので、致し方ないかと」

エッチなんて我慢していれば終わるし、こちらのがんばり次第で早く終わらせることも可能だと思っう。断言できないのは、それを試した相手が一人しかないからなんだけど。不感症らしい私にとっては、あれは男性を喜ばせて早く終わらせるものだし。

「普通の女性は、相当な覚悟がなければ体を差し出すことはできないと思っうけど」

「そう……なんですかね？」

あまり女友達とこういっう会話をしたことがないので、確信を持っつていっるわけではないけど、エツチは誰が相手でも一緒、好きな相手だから我慢できるわけではない、というのが私の出した結論。

「まあ、今のままじゃ、失敗するのは目に見えていっるよ。痛いほどに」

最後の一言に妙な力を込められて、ぐっつと押し黙る。

「キスつていっるのはね」

「わっ！」

急に腕を引っつ張られたかと思っうと、勢いよくベッドの上に転がされる。仰向けになっつたところで上から藤永さんが覆いかぶさつてきた。相手から近付かれるといっるのは、どうも居心地が悪い。それに、見下ろされていっるというのも面白くない。

しばし見っつめ合っつた後、徐々に藤永さんの顔が近付いてくる。反射的に目を閉じると先ほどと同じ柔らかな感触が唇に触れた。

「ん……」

さほど強くない力で押しつけられた唇。そして、藤永さんの舌が私の唇を撫でた。すぐに侵入してくるかと思つたのに、ゆっくりと唇を往復するだけで、中には入ってこない。

そのもどかしさに唇の力が緩んだ。その隙を見計らつたように、藤永さんの舌が侵入してくる。「ん？」

なんだろう。動きがのんびりしている……。味わうように、探るように、ゆっくりと。私知っている、貪るような乱暴なキスではない。

なんか、気持ちいい……。？ 舌を絡めるキスは気持ちが悪くて、いつもなんとなく動きを合わせていただけだったのに。

「ん……はあ」

唇を離れた瞬間に思わず漏らしたため息。頭の奥がぼーっとしてしまう。今のがキス？

「誘うようなキスっていうのは、こういうのを言うんだよ」

「何……したんですか？」

思わず聞いてしまった。だってそのぐらい、私が知っているものと違っていて。

「キス」

簡潔な回答をいただいて、私はもう一度先ほどの感触を思い出す。もっとしていたくなるような、不思議な感じだった。

「恋愛偏差値低いな」

「ええ、まあ」

確かに高いとは言えない。ダメ男と付き合つたことで懲りてしまつて、それ以降は恋愛してないし。

「どんな相手と付き合つてたんだ？」

「思い出したいくないような人とですね」

自分で言っていて嫌になる。事あるごとに頭に浮かんで、私を暗い過去に引き戻してくれた存在。「ろくな恋愛をしていないわけか。悠莉」

「はぐ」

呼ばれて返事をする。『蒲田さん』から『君』になり、ついには下の名前を呼び捨てにされたか。

「僕のことと下の名前で呼ぶように」

「なぜ？」

「これからみっちり仕込むのであれば、そのほうがやり易いから」

「そう……ですか。では、史さん」

「さん付けか、まあ、それはそれで悪くないね」

何だか嬉しそうに見えるのは気のせいだろうか。

「とにかく、藤さんを誘惑する前にいろいろと教え込まないといけないらしい。僕が協力するからには完璧に誘惑してもらうよ」

さつき嬉しそうに見えたのは気のせいだったんだ。ニヤリと不敵に笑われて、逃げ出したい気持ちになつた。

やっぱり、この選択は間違っていたのだろうか。

三

失敗にならなかつたものの、まさかの押しかけ協力者が出現。それによって抱え込んでしまった新たな不安。

結局気分が晴れることのないまま、仕事をした一週間。知らず体も疲れていたのか、仕事終わりの金曜日は、家に帰ってきてすぐに眠りについた。

『今すぐ、二十万持って来い』

土曜日の寝起き一番で出た電話は、ヤクザからのような電話だった。

「おはよう……ございます」

『悠莉、一時間後だぞ』

少しずつ覚醒してきた頭で、電話の相手の言っていることを理解しようと試みる。

「ええっと、今日は何か約束をしていたでしょうか？」

電話の相手は史さん。数日前に最悪な形で知り合ったお人。別れ際に駅前のコンビニで社員証の返却と引き換えに免許証のコピーを取られた。完全に私が逆らえないようにしてくれた史さんは、近々連絡をすと言っていた。その連絡がこれなのか。

『今、約束してるだろ』

あなたのは、約束と言わず命令と言うのですよ。私の沈黙を了承と受け取ったのか、待ち合わせの駅名を告げられた。

「私、起きたばかりで、一時間は無理な」

『とにかく来い、来なかつたら……』

電話、切れる。人の話を途中で遮さまたっておきながら、不穏なことを匂わせて切るなんて、悪質すぎる。しかも二十万って、脅し取られるの？ なんの説明もなく、一方的にお金を持って一時間以内に來いって、いくらなんでもひどすぎると思う。

でも結局のところ史さんが怖くて、私は急いで出かける準備をし、コンビニのATMでお金を下ろして走って駅に向かった。

「って、今日は休日ダイヤ」

いつもみたいに駅まで来れば、すぐに電車が来ると思ってた。考えてみれば、土日に電車で出かけるのは久しぶりだ。ここ最近の外出は近所がほとんどで、遠出するにも親の車を借りて出かけている。

約束の駅には十五分遅れて到着した。駅のどことも言わずに切られた電話だったが、さほど大きな駅ではない。辺りを見回しながら史さんを探してみたが、駅を出て周辺をぐるぐるしてみても、それらしい人は見つけれなかった。

携帯を取り出し、史さんに電話をかけてみた。しかし、携帯からはコール音が聞こえるだけで、

なかなか出てくれない。ついには留守番電話につながってしまい、一度電話を切る。

「どこにいるんだろう」

メールのアドレスも教えられているので、到着を伝えるメールを送り、改札の横で返信を待ってみた。するとすぐにメールが届く。

『あと、二十分で着く』って、まだ来てないの？ 一時間後とか指定しておいて、結局自分も遅れてくるんだったら、最初から二時間後とかにしてくれればよかったのに」

無茶な時間指定をしておいて、自分は後からのんびりって。私なんてかなり焦ったっていうのに。それに、この二十万。こんな大金を持って出歩くことなんてないから、緊張している。史さんが

普通に寄越せって言ってきたらどうしよう。最初は二十万で、次は倍、そのうち百万とかになって貯金がなくなつて……。ごめん、祥子。そこまでされたら、祥子のことを言ってしまうかもしれない。

いまいち、史さんがどういう人か分からない。無茶苦茶な人。私が騙だまそうとしている相手は史さんの知り合いだっていうのに、その人への復讐に協力するって言い出したり。突然、お金持って来いとか言い出したり。

史さんについて考えていると、今さらながら不安になる。この後、どんなことを言い出すのか、ビクビクしながら過ゆごすのだと思うと、憂鬱ゆううつになってしまう。いつまでも言うことを聞くつもりはないけど、社員証も免許証も見られてしまっていることがやっかいだ。

「やあ」

「うわっ！」

突然背中をドンと叩かれて、少しだけよろけた。振り返ると、無表情の史さんが立っていた。

当たり前前かもしれないけど、スーツ姿ではなく、Vネックのシャツにカーゴパンツ。髪の毛もざつくりと無造作な感じにセットしている。

「あの、史さんがこの時間に来るなら、私も急ぐ必要はなかったんじゃないですか」

「僕は人に待たされるのが嫌いだね。一時間後に間に合わないのは分かっていたけど、ああ言えば急いでくれると思ったから。それを見越しての一時間。まあ、思ったよりも早く到着したみたいだけど」

な、なんて言い分。待たされるのが嫌いなんて。

「私だって、待たされるのはそんなに好きじゃないですよ」

途中で声が小さくなつてしまったのは、史さんがじつとこちらを見てきて、無言のプレッシャーをかけてきたから。

「なら、よかった」

「え？」

よかつたってなんですか。いいことなんて一つもないですけど。

「僕は待たされるのが『嫌い』だけど。悠莉は『好きではない』んだよね。それって、僕よりは待たされても平気ってことだろうし。待たせて申し訳ないと思っていたんだけど、それほど問題はなかったね」

「……」

言葉遊びみたいな、この無理やり理論は何？ 確かに、きちんと『嫌い』とは言わなかったけど、普通に考えればわかるでしょう。

「ほら、時間がないし、行くよ」

「え？ どこにですか？」

「お金は持ってきたかな？」

こちらの質問には答えていただけないわけですか。

「一応、持ってきましたけど……」

史さんは頷きながらも歩き出し、私は慌ててその後を追いかける。どこに行くのか聞かされていない。辺りを見回してみるが、全く見当がつかない。

知っているけど、降りたことはない駅。しばらく行くと、街路樹の並ぶ広めの歩道があつて、それに沿つておしゃれなお店が並んでいる。

「あのお、どこに行くんですか？」

初めての街は歩いているだけでもちよつと楽しい。しかし、今は楽しんでられない状況であることを思い出し、耐え切れずに聞いてみた。

「どうせもうすぐだし、ここで聞いても、着いてから聞いても大した差はないよね」

「そういう問題ではなくてですね、大金を持つてこさせられたものだから、こちらとしては何があのだろうかとドキドキしていて」

「取つて食いやしないし、それどころか悠莉にとつていいことだよ。悠莉の計画に必要なことだと

思つて、大人しくついておいで」

今度は返答してくれたものの、肝心なところは教えてもらえないまま。しかし、思つたよりもひどいことはされないのかもしれない。

そして、ふと気付く。今日は歩くペースが少し遅い？ 初めて史さんに会つた日。藤さんだと思つて尾行をしていた時は、追いつくので精いっぱいだった。

でも、今日は普通に歩ける。ちよつと意外だ。そんな気遣いをしてもらえるとは思わなかった。

「着いたよ」

ぼーっとしていたせいか、立ち止まった史さんの背中にぶつかつてしまう。

「前に会つた時もそうだったけど、悠莉はもう少しちゃんと前を見て歩いたほうがいいと思うね」「すいません。ちよつと考えごとを」

最初の時は、急に振り返られたからぶつかつたわけだし、今はちよつと考え込んでいたからで、普段は人にぶつかることはない。だが、史さんには二度会つて、二度ともぶつかつている。こんなふうに言われても仕方がない。

「ここ……ですか？」

私なら絶対に選ばない、いや、入れないようなハイセンスな外観のお店。ためらっている私をよそに、史さんはさつさと店内に入つてしまう。

「え、史さん。ここ、本当に入るんですか？」

一瞬、何のお店か分からなかったけど、通りに面した全面窓から中の様子が窺<sub>うかが</sub>える。鏡を前にし